

## 九州女子大学における学生ボランティア事業の現状と課題 ～幼稚園・保育所グリーンティーチャーの派遣～

春高 裕美<sup>\*1</sup>・青山 優子<sup>\*1</sup>・白澤 早苗<sup>\*1</sup>・谷口 幹也<sup>\*1</sup>

中山 智哉<sup>\*1</sup>・城 佳世<sup>\*1</sup>・大迫 秀樹<sup>\*1</sup>・古城 和子<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>九州女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻

<sup>\*2</sup>九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2014年6月5日受付、2014年7月10日受理)

### 要 旨

本稿では、本学人間発達学専攻で展開している取得免許種毎の、学生ボランティア事業「グリーンティーチャー事業」の一つである、幼稚園・保育所ボランティア事業の取り組みについて現状を分析し、その課題の検討を行った。平成24年度後期から開始し、現在までに3クールが終了し、延べ153名の学生が参加し、かつ15園に学生ボランティアとして派遣された。

また本事業では、学生の実践力向上のため事前事後指導を行っている。特に事後指導では、学生の学びの振り返りを実施するとともに、より良い事業へしていくために学生への事後アンケート調査を実施している。アンケート調査の結果から学生の本事業に対する満足度は高く、一定の学習成果も見られた。しかしながら、今後、組織的な取り組みを行うためには、指導体制の充実と低意欲の学生に対する支援の在り方の2つの課題が明らかとなった。

### 1. 緒言

近年の保育現場を取り巻く情勢は著しく変化しており、依然として全国の待機児童数は22741人であり(平成25年4月)、<sup>1)</sup> 加えて厚生労働省は2017(平成29)年度末の時点で、約74000人の保育士が不足すると試算している。さらには、平成25年10月に同省が発表した「保育を支える保育士の確保に向けた総合的取り組み」<sup>2)</sup>の中で、保育士養成校においては人材育成の取り組みを、保育現場においては、新人保育士に対する離職防止に向けた取り組み(リアリティショック対策)を打ち出した。このように昨今の保育者不足は急務の課題として途切れることなく提唱し続けられている。

また、少子化を取り巻く諸問題も顕著化してきており、現大学1年生が出生した平成7年の合計特殊出生率は1.42<sup>3)</sup>であり、保育を学ぶ学生自身もその少子化の中に身を置くひとりである。それゆえ、「子どもが好き」「保育の仕事がしたい」と夢と希望を持ち入学して来た学生ではあるが、前述の通り、学生自身も入学以前に子どもと関わる生活体験が少ないように日常の授業の中でも感じ取れることが多々あった。それを裏付けるかのように、本学の

初等教育実習（幼稚園実習）事後アンケート調査によると、本学の学生像として、1. 子どもの生活体験がない、2. 本学の学生の気質として消極的である、などの実態が浮かび上がった。これらの社会的な課題と本学学生の現状を鑑み、保育・教育実習の現場に出る前に、現場を体験し、実習記録にとらわれることなく、純粹に子どもを知ることを目的とした保育ボランティアを導入することが急務と考えられた。

本稿では平成24年度後期から開始したこの学生ボランティア事業の現状について報告を行い、今後の課題について検討を行う事を目的とする。本稿の構成は、(1) 本専攻のボランティア事業の概要、(2) 平成24年度及び平成25年度の幼保グリーンティーチャー実績、(3) ボランティア事後指導で実施した学生アンケート結果からの学習成果の分析及び、協力園への聞き取りの結果、これらを総合的に考察し、今後の幼稚園教諭、保育士を目指す学生へ向けたボランティア事業のあり方について検討する。

## 2. 本専攻の学生ボランティア事業の概要

### (1) 本専攻での取得可能免許種

九州女子大学 人間科学部 人間発達学科 人間発達学専攻は1学年を定員130名とする4学年で構成され、教員や保育者養成を目的とする学科である。学生の主たる取得免許種は小学校教諭1種免許状、幼稚園教諭1種免許状、保育士、特別支援学校教諭1種免許状である。図1は取得可能免許状とその取得予定者比率である。

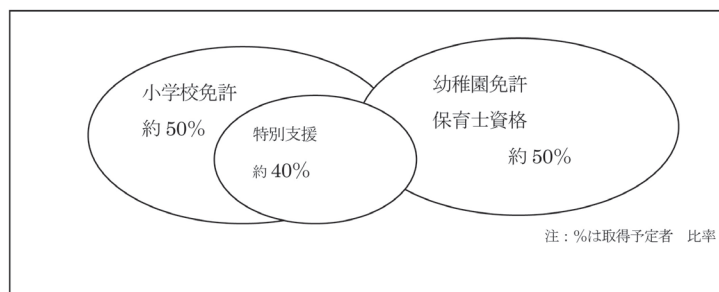


図1 人間発達学専攻での取得可能免許種及び取得予定者比率

### (2) 現行の学生ボランティア事業の内容

人間発達学専攻においては、取得免許種毎に学生の実践力向上のための学生ボランティア事業を展開している。我々は、この学生ボランティア事業を「グリーンティーチャー事業」と呼んでいる。グリーンは、「緑の、未熟な、未経験の、元気のいい、若々しい、新鮮な」という意味を含んでおり、今後の成長を期待したいという思いも込め、「グリーンティーチャー」と命名された。図2はその概要を示したものである。

本専攻のグリーンティーチャー事業は小学校での学習サポーターを先駆けとして開始され、

遅れて幼稚園教諭・保育士を目指す学生向けのボランティア事業が開始となった。

平成24年度後期から幼稚園・保育所ボランティアを開始し、現在までに3クール、延べ153名の学生ボランティアを派遣しており、現在は大学周辺の幼稚園、保育所を中心に10～15園に派遣している。

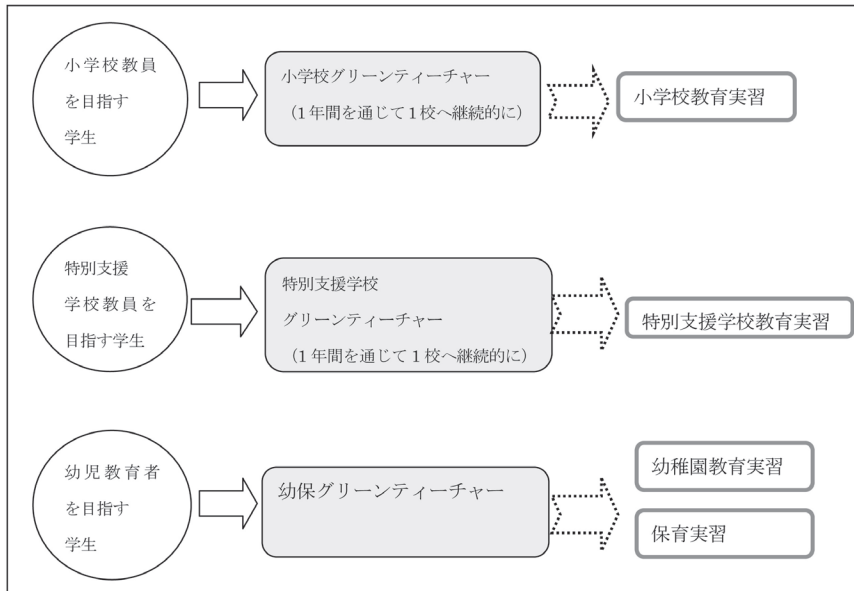


図2 取得免許種毎のグリーンティーチャー事業

### (3) 幼保ボランティア事業について

次に、幼稚園・保育所における学生ボランティア事業（以下、幼保グリーンティーチャー事業とする）について概要を述べる。

#### 1) 活動目的

本事業の目的は、「体当たりで子どもと遊び、子どものことをもっと知ろう」をテーマに、学生は目指す保育者への自己実現に向けて自主的に行動を起し、子どもとじっくり向き合い、子どもとしっかり遊べる実践力を身につけることである。主な活動内容は、幼稚園、保育所での子どもの遊び援助、子どもに対する生活援助の手伝い、清掃や保育室の環境整備（消毒など）の手伝いである。

#### 2) 活動する期間及び時間

##### ①年間スケジュール

幼保グリーンティーチャーでは、1年の活動を前期と後期に分け、スケジュールリングを行っている。あらかじめ、試験期間や実習期間、長期休暇を除外していることで、継続してボランティア活動が行えるよう工夫している（表1）。また、ひとつのボランティア期間が通

年ではなく半期であるのは、受け入れ側の園数に限りがあることと、できるだけ多くの学生にボランティア参加の機会を与えるためである。

②活動日と活動時間

ボランティア活動は、原則、月曜日から金曜日までの固定した曜日で、週1回の活動ペースで実施している。1回の活動時間はおよそ1日2時間程度とし、学生の授業空き時間を利用して、学業に支障を来さないように活動している。

表1 年間スケジュール

前期						後期					
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
				試験	実習				試験	実習	
登録	ボランティア活動				登録	ボランティア活動					

↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑

矢印（↑）は事前事後指導を実施している。

3) 事前事後指導の内容と全体の流れ

図3は幼保グリーンティーチャー事業の全体の流れを示している。

学生は、①登録カードにて大学で活動登録を行い、②活動前に学内で事前オリエンテーションを2回受講し、③現地での事前オリエンテーションに出向く。④約3ヶ月のボランティア活動を行い、⑤活動後に事後指導を受講している。学生ボランティアではあるが、本学では活動前後の指導を重要視している。

また、ボランティア担当の教員は、協力園の先生方と、①ボランティア開始前、②現地オリエンテーション引率時、③ボランティア終了後に協議の場を持ち、ボランティアの内容や学生の所作に関わる事、事務手続きに関する事などを、その都度協議している。これは、受け入れて頂く協力園の現場の先生方との連携を絶やさず行い、学生を指導するためである。

事前指導内容については、表2の通りである。学内のオリエンテーションでは、ボランティア活動の目的、身だしなみ、礼儀、個人情報の保護、欠席連絡等に関する諸注意をはじめとして、絵本の読み聞かせ、手遊び等の実技指導を実施している。現地でのオリエンテーションでは各園での諸注意をお話頂き、配属クラス等を決定している（表2）（図4）。

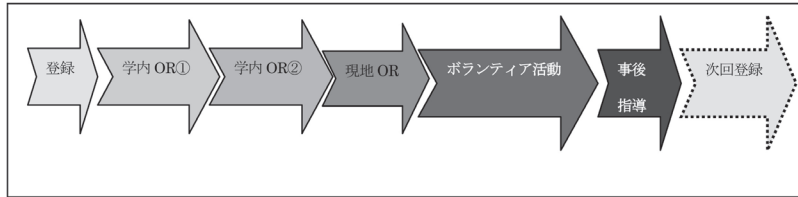


図3 幼保グリーンティーチャー事業の全体の流れ

また、ボランティア活動後は、事後指導（反省会）を実施している。反省会はボランティア参加学生と本学教員とによって実施される。参加学生数が多いことから、数グループに分けて実施している。事後指導の内容は、ボランティア先で特に印象に残ったこと、関わりで難しかったことなどを学生1人1人が口頭発表し、学生間で議論したり、上級生が下級生へ助言したり、教員が助言を加えたりしている。

表2 事前・事後指導の内容

事前指導	学内オリエンテーション①	ボランティアの目的、諸注意（身だしなみ、礼儀、個人情報保護、欠席連絡など）
	学内オリエンテーション②	実技指導（絵本の読み聞かせ、歌遊び、手遊び）、活動カード記入指導
	現地オリエンテーション	教員引率にて幼稚園・保育所に出向き、園関係者よりオリエンテーション、配属クラスを決定
事後指導	学内反省会	ボランティア活動終了時に教員・学生にて反省会を実施



図4 現地オリエンテーションの様子

#### (4) 本事業に要する諸事務

本事業に要する諸事務は表3の通りである。中でも「ボランティア派遣表」による協力園との連絡体制を取っているのは、学生ボランティアにありがちな「都合が悪いと休む」「定期的にボランティアに行かない」等の自己都合による欠席に歯止めをかけるためである。また、派遣前後で園に大学教員が出向き、園からの要望や改善点などを、相互に協議している。健康診断書の提出などは園からの要望で取り入れられたものである。

表3 本事業に要する諸事務

活動登録	学生は所定の期間に「ボランティア登録カード」にて活動登録を行い、その登録カードの写しを、個人情報保護に充分留意しながら、派遣先へ提出している。
健康診断書	大学で4月に実施される定期健康診断の診断書を各幼稚園・保育所に提出している。
活動記録	学生は活動日の活動内容を活動カード(図5)に記入し、翌月5日までに大学側担当教員に提出している。併せて前月分の活動報告を大学教員に口頭で実施している。
ボランティア派遣表	学生ボランティアの活動予定は事前に「ボランティア派遣表」を用いて大学担当者が派遣先に一括してひと月ごとに提出している。
欠席連絡	正課授業、学校行事(大学祭等)、就職活動(面接や説明会)等とボランティアが重複した場合は、ボランティアを欠席させている。また、自然災害等によって大学が休講措置を決定した場合もボランティアを欠席させている。事前に欠席がわかっている場合には、大学から「派遣予定表」で連絡を行い、病気や忌引きなどの突発的な事象については、本人が派遣先と大学担当者へ電話連絡を行っている。
保険関係	本学ではグリーンティーチャー事業を専攻全体の事業として取り組んでいるため、ボランティア学生にボランティア保険ではなく、実習と同等の学生教育研究災害傷害保険(学研災)、学研災付帯賠償責任保険(学研賠)を加入し不測の事態に備えている。
その他	派遣先の園とは、「ボランティア依頼書」「ボランティア許諾書」等の文書での取り交わしを行っている。

幼保ボランティア 活動カード		
学年	学籍番号	氏名
2		
連絡先		アドバイザー
		先生
ボランティア園		活動曜日・時間・活動ペース
幼稚園		( ) 曜日 16:40 ~ 18:00 ( / ) 回 / 週

活動報告書		
日時	活動内容・遊びの内容	担当
10月11日 16:40 18:00	今日は外で遊んでいる預り保育の園児と一緒に遊んだ。挨拶したとたん、「先生ー!!」とかけ、「000!!」「見!!」と元気な私たちを受け入れてくれた。先生、私を含めて4人で20人ほどの園児を見ていたが、運動場のいすいすいして遊ぶ子どもたちを全部と見なければならぬことの難しさを感じた。ラッコやゾウガエルなど危険な遊具を使っているときは細心の注意を払わなければならない。	春高
10月18日	だんだん気温も下がって今日(室内)遊ぶことになり、まよごとブロックなど各自好きなこととして楽しんでいた。先週訪ねていたことを覚えてくれた園児も多く先週よりも積極的に関わることができた。おじいちゃんやイマージの共有が楽しいとまよの園児の光景も見ることができた。保護者の方がお迎えに来ると、「1Aに5.5分」とつづいて園児に上向き言葉がけができたことが深かった。	春高
11月1日	前回の2週間が続き、少し緊張していたが、子どもの目の高さに合わせてお話しすると、一生懸命言葉を伝えようとする姿を見ることができた。講話をよく出る園児の意欲がわかった気がした。また、保護者の方がお迎えに来ると先生が毎回「おつかいどう」と声をかけていて「ありがとう」と保護者の方への自己満足も印象的だった。おじいちゃんやイマージの読み聞かせのとき、子どもの興味をもち話のつづきを促してあげた。	春高
11月15日	今日は少し暖かかったので「このドック」をした。円と正方形の中間の子も道はボールに当たらないように進める、投げたものは必ず下からこぎ子などのルールがある。年上の子が年下の子からボールを取ってしまふこともあったがみんな楽しんで遊んでいた。まだまだ遊ばない子ども達に「1周したからおじいちゃん、おじいちゃん満員バスで室内で遊べる時間を過ごした。	春高

図5 活動カードの実際(下線部 筆者加筆)

### 3. 平成24年度及び平成25年度の幼保グリーンティーチャー実績

#### (1) 派遣園の広がり

平成24年、本事業は「幼保あそびのボランティア」として始動した。開始当初は、本学附属幼稚園をはじめとする、大学が所在する八幡西区の幼稚園3園と保育所2園に受け入れをお願いした(平成24年度 後期:9~12月)。

次に、活動で特に混乱もなく、学生の成果も見られることから、この事業を拡大することにした。協力園は大学周辺の園から、学生が居住する地域の園へ拡大した。派遣地域は北九州府八幡西区、若松区、戸畑区、門司区、田川市、直方市、宗像市、佐賀県多久市と最大で15園まで拡大した。学生の居住している地域内に派遣先の園があるため、派遣に伴う交通費などの経済的負担軽減と、通園時間の短縮につながった。また、居住地域だけでなく、学

生が学びたい保育を実践している園へと2方向で拡大した。加えて名称を「幼保グリーンティーチャー」とした（平成25年度 前期：4～7月）。

さらに事業開始後1年を経過し、引き続き学生の学びたい保育を実践している園を開拓している。現在までに提携している協力園は15園になった（平成25年度 後期：9～12月）。

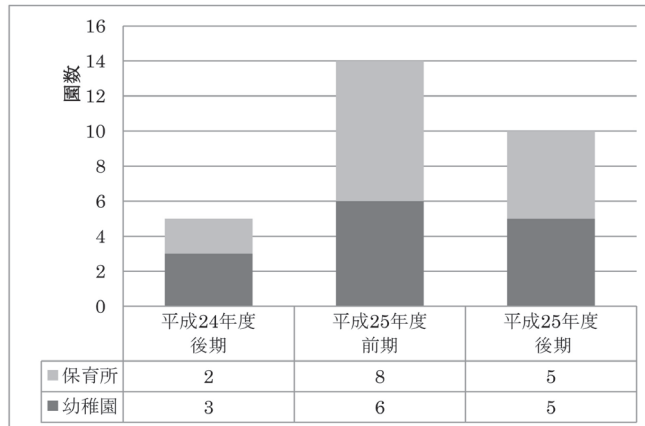


図6 協力園数

## (2) 派遣学生数の推移

現在までの派遣学生数は、1年生11名、2年生84名、3年生40名、4年生18名の計153名である。2年生の参加が最も多いのは、本学では、2年生の学年末に「保育所実習Ⅰ」に出るためか「実習に出る前に、現場の事を少しでも知っておきたい」という理由で参加する学生が多い。また、経時的に見ると、平成24年度後期は34名、平成25年度前期は64名、平成25年度後期は55名の学生を派遣している。カリキュラムの都合上、後期は正課授業数が多く、学生の空き時間が少ないため、学生ボランティアの派遣数が前期に比べるとやや減少している（図7）。

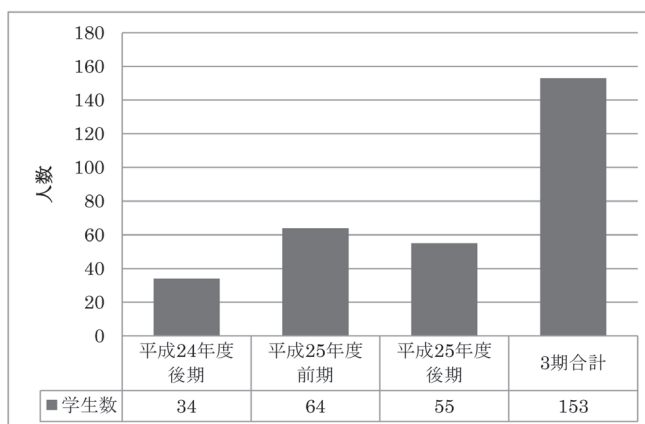


図7 派遣学生数の推移



#### 4. 学生アンケート結果からの学習成果の分析及び、協力園への聞き取りの結果

今後、本事業をより良いものにしていくために、ボランティア活動終了時に、無記名式の事後アンケート調査を実施して、学生の率直な意見を聴取している。アンケート実施前に、本調査と学業成績とは一切関係なく、不利益は被らないことを学生へ口頭で説明したうえで実施している。平成24年度及び平成25年度の本事業に関する学生アンケートの結果を報告する。

なお今回の報告では、ボランティア経験の有無によるデータの偏りを避けるため、本事業の初回参加者78名のデータを抽出し分析を行った。その結果について述べる。

##### (1) 平成24年度及び平成25年度の本事業に関する学生アンケートの結果

###### 1) アンケート調査の方法及び内容

- ・実施時期 平成24年12月，平成25年7月，平成25年12月
- ・調査対象

幼保グリーンティーチャーに参加した153名（有効回答 145 回収率 94.8%）

本報告については初回参加者78名のデータを抽出し分析を行った。

- ・調査内容

【フェイスシート】①学年 ②ボランティア活動経験の有無 ③派遣園 ④通園方法  
⑤通園時間 ⑥平均活動時間 ⑦欠席の有無と回数 ⑧対象児の年齢

###### 【学びの成果に関する調査】

- ⑨目標達成度：ボランティア活動の目標は達成できたか。
- ⑩個人目標の有無：ボランティア活動に向けて個人的な目標はあったか。
- ⑪個人目標達成度：個人目標は達成できたか。
- ⑫実践力向上感の有無：ボランティア活動で実践力はついたと思うか。
- ⑬今回のボランティア活動は今後の学びに役立つと思うか。
- ⑭継続の意志：今後もボランティア活動を続けたいか。
- ⑮ボランティア活動前後で、子どもの捉え方の変化があったか。

⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮は3件法で回答を求め、⑩については2件法で回答を求めた。また⑩の個人目標については、その内容を自由記述させた。

###### 2) アンケート結果と考察

本事業においては「体当たりで子どもと遊び、子どものことをもっと知ろう」をテーマに、遊びのボランティア活動をすることが主な目的である。子どもとじっくり向き合い、子どもとしっかり遊べる実践力を身につけることを目標としている。その目標達成度に関しては、「充分できた」と「まあまあ出来た」を合わせると99%になり、本来の目的は達成できていると考えられる（図8）。

また、個人的な目標を掲げて、ボランティアに臨んでいる学生が8割おり（図9）、自主性を持ってボランティア活動に臨んでいることが伺える。この個人目標の達成度についても「充分できた」と「まあまあ出来た」を合わせると98%になる（図10）。

さらに、このボランティア活動の大きなねらいであった「実践力の向上」に関する問いに対しては、「充分ついた」「まあまあついた」の肯定的回答が96%に達している（図11）。

このボランティア活動が、今後の学びに役立つかという問いに対して、「充分役立つ」「まあまあ役立つ」を合わせると100%の学生がボランティア活動を肯定的に捉えていることがわかる（図12）。

加えてボランティア活動の前後での「子どもの捉え方の変化」の有無に関しては93%の学生が何らかの変化を感じており、子どもとの生活の中から現実の子どもを捉えることができたのではないだろうか（図13）。

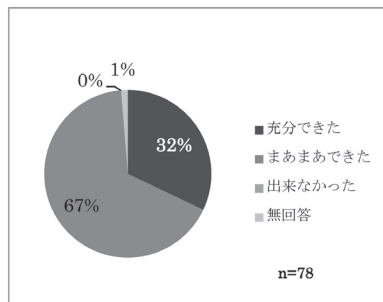


図8 目標達成度

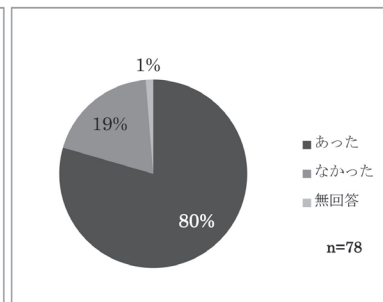


図9 個人目標の有無

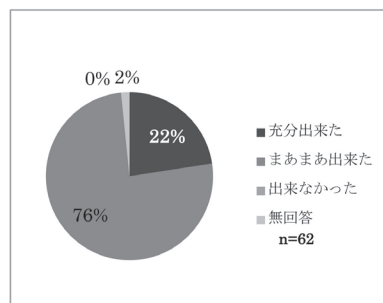


図10 個人目標達成度

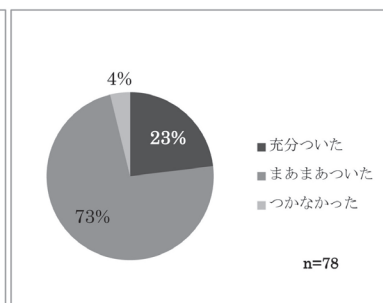


図11 実践力向上感

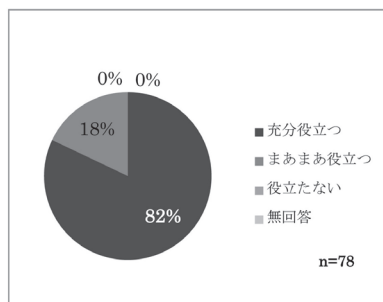


図12 今後の学びに役立つか

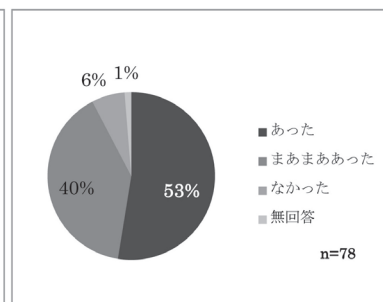


図13 活動前後での子どもの捉え方の変化

## (2) 協力園への聞き取り

現場の管理者・保育者からの意見は表4の通りである。多くの場合「延長保育中の保育士の人数が経時的に減っていく時間帯なので、助かっている」に代表される、肯定的意見が多い。加えて、正課の実習とは違い「記録の指導がない」ことが肯定的に捉えられているようである。

また反対に、「十分に挨拶のできない学生がいる」「指導に対してきちんとした受け答えのできない学生がいる」などの意見をもらうこともある。しかしながら、本専攻では可能な限り協力園へ大学教員が出向き、園側と調整を重ねており、このような意見を頂いても、事後指導等で学生へフィードバックできるため、同じ園から同じ指摘を受けることは非常に少なくなっている。さらには調整を重ねることで、園側に「大学側と協同して取り組んでいる」という安心感をもたらし、加えて過剰な負担感をかけることなく経過してきているのではないかと考えられる。

表4 協力園の聞き取り結果

- ・延長保育中の保育士の人数が経時的に減っていく時間帯なので、助かっている。
- ・現場の保育士は『学生さんから見られている』という意識をもつので気が引き締まって良い。
- ・実習のように記録の指導がないので現場も助かっている。
- ・事前に派遣表でひと月分の派遣予定が把握できるため、製作活動の補助など人手の要る作業に計画的に組み込み、助かっている。
- ・子どもたちが、学生さんが来るのを楽しみに待っている。
- ・その学生の人となりを見ることができるので、実習の短期間とは違い、採用の面でも良い人選の機会となっている。
- ・このまま就職してもらいたいが、2年生なので、あと2年待たなければならないのが残念。
- ・3カ月くらいが受け入れる側としてもちょうどよい。
- ・記録の指導がないので、その日の活動の終わりに「ミニ反省会」を担任教諭と持つようにしている。ボランティアとはいえ、沢山のことを学んで帰ってもらいたい。
- ・(今期派遣がない園の園長より)とても残念。次は是非派遣して欲しい。
- ・ボランティア期間外の行事に参加してもらいたい。
- ・記録指導がないので助かっているが、どのくらい学生が学んでいっているのか、現場はわからない。
- ・その場で質問して欲しい。
- ・低学年の学生で、挨拶が充分にできない学生がいる。
- ・指導に対してきちんとした受け答えのできない学生がいる。

## 5. 総合考察

平成24年度後期から開始した幼保グリーンティーチャー事業であるが、派遣実績からも学生アンケートの結果からも概ね順調な経過を遂げていると考えられる。

アンケート調査の結果から、学生の本事業に対する満足度は高いことが伺える。前述の活動カードの文面の中にもあるように、学生は本事業を通して、遊びや子どもの実態把握だけでなく様々なことを吸収していることがわかる。例えば、保育者の保護者対応の場面を垣間

見たり、一つの場面に大勢の子どもを責任もって保育していく困難さを経験したり、講義で学習する内容の具現化であったりと、その学びの内容は多岐にわたる。成田（2009）が「保育の専門科目とインターンシップなどの臨床科目が相互に補完し合って専門的な力量の形成につながる」<sup>4)</sup>と指摘しているように、幼稚園や保育所でのあそびを中心としたボランティア活動ではあるが、専門的な力量の形成かつ実践力向上につながるものと考えられる。

平成24年度後期から平成25年度後期までに実施した幼保グリーンティーチャー事業について、今後の課題として大きく2つの課題が挙げられる。

本事業への参加者は、1年生後期（初学者）から就職を目前に控えた4年生まで、幅広い学生層からの参加があった。アンケート調査の結果からもわかるように、ほとんどの学生が実践力の向上感を感じ、子どもの捉え方の変化を感じつつ、今後の学習に役立つと回答している。これは、ボランティアではあるが単なる体験活動に留まらず、ボランティア前後での事前事後指導を行い、ボランティア期間中も活動カードによる指導を行った結果であると考えられる。しかしながら、個々の学生が抱く、日々の疑問へのフィードバックができていないかと言えば、そうでない部分もある。これに対して、教員から学生への指導だけでなく、学びの段階の違う者同士が、教えあう環境を整える必要もあるのではないかと考えられる。そのために、今後はボランティア経験者を中心としたボランティアリーダーの育成など、自主性を尊重するような活動へ発展させていく必要があるのではないだろうか。また、指導体制の一つとして、ICT等の情報空間活用<sup>5) 6)</sup>の可能性もあるのではないだろうか。

次に、意欲的でない学生へのアプローチについての課題がある。本事業への参加は学生の自主性に委ねられており、参加する学生は比較的積極的な学生が多い。正課の実習評価においても、意欲的でない学生は、現場への適応に課題があり、本来であればこのような学生ほど、ボランティアのような課外活動への参加が望ましい。意欲的でない学生へは、現在も参加支援の個別的な働きかけを行ってはいるが、それと共に、中央教育審議会が「新しい時代における教養教育の在り方について」<sup>7)</sup>の答申で奨励しているように、ボランティア活動のカリキュラムへの導入が必要であると考えられる。また同様に、現にボランティアとして活動している学生も授業外で活動しており、学生の負担は大きい。ボランティアに参加できていない学生に対しても、ボランティアとして参加できている学生に対しても、カリキュラムへの導入は両者に対してメリットが大きいと思われる。

付記：本報告は、九州女子大学・九州女子短期大学平成25年度特別研究費受託により行った「学生ボランティア事業（「グリーンティーチャー」制度）の拡充に関する実証的研究」の一部にあたる。

## 引用参考文献

- 1) <http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11601000-Shokugyouanteikyoku-Soumuka/> 厚生労働省 2014/05/14 アクセス
- 2) [www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou.../0000026218.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou.../0000026218.pdf) 厚生労働省 2014/05/14 アクセス
- 3) 国民衛生の動向 2012/2013 vol59 No9 厚生労働統計協会 p49
- 4) 成田信子 他「教育保育インターンシップⅡの現状と課題—保育所・幼稚園の場合—」 関西国際大学研究紀要 第10号 2009 p33
- 5) 小倉美津夫 「学校インターンシップと教育実習の連結：その効果について」 日本福祉大学 全学教育センター紀要 第2号 2014
- 6) 渡辺俊太郎 他「現場での学びを活かした保育士・教員の養成—全学年における年間インターンシップ実習の取り組み」大阪総合保育大学紀要 第4号 2009 p170
- 7) 中央教育審議会答申「新しい時代における教養教育の在り方について」2002

## **The current situation and issues of the students' volunteer project at Kyushu Women's University : The dispatch of student volunteers to kindergartens or nursery schools**

Hiromi HARUTAKA, Yuko AOYAMA, Sanae SHIRASAWA,  
Mikiya TANIGUCHI, Tomoya NAKAYAMA, Kayo JYO, Hideki OSAKO,  
Kazuko KOJYO

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities,  
Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

### Abstract

This paper analyzes the present conditions and examines issues with regard to our child-care volunteer program at kindergartens and nursery schools. This program, implemented by our major, is as a part of the "Green Teacher Project" to dispatch student volunteers to various kinds of schools corresponding to each type of license or qualification. Starting from the second semester of 2012 academic year, the program has been carried out three times so far. We sent a total of 153 students to fifteen facilities as volunteers.

To further enhance their practical skills and knowledge, this program also includes pre- and post-training. Especially, in the post-training we hold a meeting for reviewing and conduct a questionnaire survey to improve our program. The survey indicates that the participants derive great satisfaction from this program and obtain some positive results. However, in order to launch a large-scale and systematic project in the future, two challenges that must be overcome have become clear.

**Key words** : students' volunteer project, Green Teacher Project, kindergartens and nursery schools